

資料

ルソーの泌尿器疾患について

齊藤 博

J. -J. Rousseau and His Urologic Diseases

Hiroshi Saitoh (Department of Urology, Saitama Medical School, Saitama Medical Center, Kawagoe, Saitama 350-8550, Japan)

Jean-Jacques Rousseau (1712-1778) is the 18th-century thinker who has most profoundly influenced to vast areas of present-day philosophy, education, literature, politics, and religion. On the other hand, he was said to have been a complicated man who showed genius mixed with madness. His thought was full of paradox and contradiction, and he hardly could be considered a normal person. I studied his urologic diseases as described in his autobiography, Les Confessions, as well as his other works and letters. He described difficult urination accompanied by urgency in a pattern most consistent with congenital urethral stenosis, congenital urethral valves or neurogenic bladder. However, he noted no symptoms suggestive of urinary tract infection or renal dysfunction in early childhood, only later complaining of urinary tract infection symptoms. He eventually underwent transurethral manipulations with urethral sounds and catheters as treatment for difficult urination. Severe urethral pain in his later life may have been related to so-called prostatism or prostatodynia. He finally complained of a severe headache following a morning walk and breakfast. He died suddenly soon afterward, presumably of cerebrovascular disease, at the age of 66 years.

Keywords: Rousseau, pathography, urology, urination

J Saitama Med School 2004;31:183-193

(Received June 11, 2004)

はじめに

ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778, 享年66歳) は、今日にもっとも影響をおよぼした18世紀の思想家の一人で、その影響はきわめて広い範囲にわたり、哲学・教育・文学・政治・宗教の諸問題におよんでいる¹⁻⁸⁾。一方、ルソーはその中に「天才と狂気」をもち、その思想は逆説と矛盾に満ち、正常から遠い普通でない人間であったといわれている¹⁾。ルソーを理解しようとするとき、その人や生活を知ることの一つの重要な手段である¹⁾。ルソーが病気・精神障害があるのではないかとの論考がある^{1, 3, 8-10)}。

病気・精神障害がある個人 (傑出した芸術家・思想家など) の芸術・思索・精神活動に及ぼした影響の研究として、病蹟学 (Pathography) がある¹¹⁾。病蹟学は個人の生涯を疾病、殊に精神病理学的な観点から研究分析し、その活動における疾病の意義を明らかにしよ

うとする学問で¹²⁾、ルソーは病蹟学興味がもたれている人物である^{3, 13)}。

人間ルソーの性格的特異性として、各年代における、「依存的人間」、「戦闘的人間」、「隠遁的人間」の矛盾相克が目ざされている³⁾。「ルソーは、いろいろ病気をしたし、ことに尿道の持病になやんだけれども、根本的には、極めて健康な肉体の持ち主であった」³⁾とされている。しかし、泌尿器疾患に関する記載は、一般に公にすることを避ける傾向にあり、どのような疾患であったかは必ずしも明らかではない。本論考は、ルソーがどのような疾患、特に、泌尿器疾患に罹っていたか、それを自分自身どう考えていたかを、泌尿器科医の視点から検討した。

方法

ルソーの疾患については、自伝的作品である『告白』^{14, 15)}に書かれている (第1部, 1~6巻, 1764~1767, 52~55歳; 第2部, 7~12巻, 1769~1770, 57~58歳)。『告白』以外にも、『人間不平等起原論』¹⁶⁾ (1755, 43歳;

『不平等論』と略、手紙を含む)、『演劇について』¹⁷⁾ (1758, 46歳、『演劇』と略)、『社会契約論』¹⁸⁾ (1762, 50歳)、『エミール』¹⁹⁾ (1762, 50歳)、『マルゼルブ院長あての四通の手紙』¹⁸⁾ (1762, 50歳ごろ; 『手紙』と略)、『孤独な散歩者の夢想』²⁰⁾ (1777, 65歳、死亡の前年、『散歩』と略)にも、疾患や医師に対する考えが書かれている。

上記作品中の、ルソーの泌尿器疾患についての記載を検索したが、同時に、ルソーの疾患全般についての知識、文中に記載されている病名、医学についての考え方、医師に対する態度より、ルソーが自分自身の疾患をどう考えていたかの検討材料とした。

疾患については、訳文を原文のまま「 」をつけて記載(『告白』の仏語の日本語訳は小林善彦訳を採用)、上記以外のルソーの作品、手紙中の記載については、既存の論考を()をつけて引用し、論者の名前を記した(医学用語は文末の著者注1を参照)。疾患の時期(年齢)は作品中の記載以外に、ルソー年表(桑原武夫)³⁾を参照して、疾患の時期を推測して、(時期:年, 年齢:歳)を附し、年齢順に記した^{著者注2)}。(原注)、(記者注)、(著者注)はそれぞれルソー、記者、著者の注である。ルソーの(原注)には、文末にまとめてある長文の注と、文中にある短い(注)があるが、ここでは、すべて、文中に(原注)として記載した。(著者注)は末尾以外に、短い(補足説明)を文中に入れた。カタカナ表記は記者、論者により引用箇所異なる。本文では疾患、医師、患者を一般名として用いたが、引用により、疾患、疾病、病気、医師、医者、患者、病人が用いられている²¹⁾。

ルソーの自分自身の疾患、症状に関する記載

1) 幼児期～青年期(1712～1742, 0～30歳)

{1} 出生時から小児期まで

「私は死なんばかりの状態生まれ、育つ望みはほとんどなかった。生まれたときある疾患の萌芽を宿し(記者注、持病の尿閉症)、それは年月とともにつって、いまではときに緩むことはあるが、それはもっとひどい別の苦しみ(記者注、迫害をさす)を私に与えるだけである」(『告白』1巻16)。

「子どものころにその最初の発作、完全に不治の病(記者注、尿閉症)」(『手紙』303)。

{2} 青年期

{1735～1736, 23～24歳}「私は健康な体質だし、それいかなる不摂生もしないのに、眼に見えて衰弱して行った原因が、どこにあるかわからない」、「私は体格もかなりがっちりしていて、胸幅も広いから、肺は楽に活動できるはずである」、「ところが、息切れがし、圧迫を感じ、知らないうちにため息し、動悸が高まり、咯血した。微熱がでた」(『告白』5巻242)。

「(実験でびんが爆発して)びんは爆弾のように、私の顔に向かって飛び散った。私は六週間以上も、眼が

見えないままだった」(『告白』5巻242)

「私はやせて、顔も黄色になり、ほとんどぼうっとして、・・・疲れきったあと、まえよりも衰弱しているのに気がついた」(『告白』5巻244)(記者注、ルソーは死ぬと思い、遺言書を書いた)。

{1741, 29歳}「身体全体に、突然ほとんどわけのわからない変動を感じた」、「動脈が非常に激しく打ちはじめた」、「ひどい耳鳴りがそれに加わった」、「私の動脈の鼓動と耳鳴りとは、このとき以来、つまり三十年以来、一刻も私から去らなかった」、「やつれていたのが、ますますひどくなった」、「不眠と、たえず息が切れる」、(『告白』6巻251, 252)。

「激しい苦痛がなかったので、・・・、自分の身体が継続的にゆっくりと衰えていくを、ある避けられない進行として眺め、死のみがそれを停めることができるようになる」、(「毎日を自分の生涯の最後の日のように考えながらも、永久に生きるはずであるかのような熱意で研究したのだった」、「私は厳しい食餌療法をやめ、葡萄酒をまた飲み、・・・健康な人間の日常生活の暮らしにまた戻った」(『告白』6巻257)。

「眼に見えて衰弱、死人のように青ざめ、骸骨のようにやせていた。動脈は恐ろしくうち、動悸はますます早くなり、たえず息苦しく、ついに衰弱があまりひどくなったので、動くのも苦になった」「息切れ」、「めまい」、「無為」、「憂鬱症」、「老年になり、じっさいはひどい病気なのに、私の肉体は力を取り戻したと思われるが、それは不幸をもっと感じるためのようだ」(『告白』6巻272)。

「自分が死にそうなのに驚くどころか、まだ生きていられるのに驚いた」、「ある病気の記述を読むと、自分の病気だと思わずにはいられない」、「この不吉な研究(解剖学)のため、病気になっただろうと確信している」、「心臓の肉腫だと想像する」(『告白』6巻273)。

「憂鬱症はなおっていたが、他の病気はすべて残っており、習慣でそれほど感じなくなっていたとはいえ、突然かかったなら、・・・死ぬと思うほどだった」、「医者たちは、私の病気がぜんぜんわからず、私を気で病んでいとみなし」、「この方々(医者と哲学者)は、私の病気についてはなにも知らない。したがって、私は病気ではなかった」(『告白』6巻283, 284)。

「膀胱の構造に欠陥があって、幼年期のあいだ、ほとんどたえず尿閉症にかかっていた」、「私の頑丈な体質がついに勝ち、若いあいだ健康がしっかり固まった」、「神経衰弱と、すこしでも暑気にあたると調子が悪くなって、しばしば尿意をもよおすのをのぞけば、三十歳までは、幼年時代の虚弱を身に感じたことは、ほとんどない」(『告白』8巻392)。

2) 青年期～壮年期(1742～1762, 30～50歳)

{1744, 32歳}「風邪を用心しなかったために、肺炎にか

かり、もう少しで死ぬところだった。若い頃、しばしばそういった炎症の病氣、肋膜炎やとくに咽頭炎をやった。そういう病氣には非常にかかりやすく、…、死をかなり真近から見ることになり」(『告白』7巻320)。

(ヴェネチアの娼婦と10フランで関係)「私は病氣を移されたと、全く確信して館に帰ったので、戻ってやった最初のことは、医師に人をやって、煎じ薬を求めることだった。じっさいなんの不快感もなく、なんの外的な徴候の証明もないのに、三週間というもの、私が苦しんだ精神的な不安には匹敵するものがない。…彼(医師)は私が特別の体質だから、簡単には感染しないのだと納得させて、やっと安心させた。…私の健康がこの面では決して犯されないのは、この医者か正しかった証拠である」(原文のまま)(『告白』7, 344)。「そういう病氣(梅毒)にはかからない体質だと」(『告白』12巻262)。

(1748年(36歳)には病氣が再発した。以前からの尿閉症に腎臓痛が加わり熱が高く、さらに胃が激しく痛み、絶えず吐き気があり、ひどい下痢もある)(樋口、他：ママンへの手紙で『告白』には伝えられていない³⁾ 著者注3)。

{1749~1750, 37~39歳}(フランクイユ氏の秘書となるが、以下はその間の出来事)。

「旅行の疲れと、ひどい暑さに苦しんだため、膀胱炎と腹痛が起こり」、「暑氣にあたり激しい腎臓炎」、「病状は前よりなお悪く、私は五、六週間、考えうるもっともみじめな状態で、病床にいた」、「モランをよこしてくれたが、その熟練と巧みな腕にもかかわらず、ひどい痛みにくるしみ、どうしても消息子(ゾンデ)を入れることができなかった」(記者注、モラン医師：慈善病院の主任外科医)、「彼のすすめでダラン(記者注、軍医、国王付外科医の称号をもつ)に診てもらった。この人の消息子のほうがやわらかく、やっとはいった」、「モランは生命はあと六ヶ月ももたないと断言した」(『告白』8巻392)。

「診てもらった医者が、病氣と同じくらい私には悪かった」、「治療をしてくれたが、少しも楽にならず、私をひどく衰弱させてしまった」、「彼ら(医者)の指示に従えば従うほど、私は黄色くなり、やせて、衰えた」、「尿閉症、腎石、結石などしか思い描かなかった」、「ダランの消息子だけが多少効き目あり、それなしでは生きていけないと考え、しかしそれも一時の安らぎにすぎないけれども」、「私は大金を払って、消息子を大量に買い込み」、「8年か10年のあいだは、それを良く使ったので、いままだ残っているのを加えると、50ルイほど買ったはずだ」、「こんなに高く、苦しくて、つらい手当てをして、気を散らさずに、仕事ができるはずがない」(『告白』8巻396) 著者注4)。

{1758, 45歳}「わたしは病氣で、心も暗かった」(『演劇』28)。

{1758頃}「捺染機で指二本を挟まれ怪我、出血、傷み」(『散歩』74, 20年前の話)。

「しばしば病氣がちで」(『告白』9巻14)。

「尿閉症の激しい発作がしきりにおき」、「しばらく前から苦しんでいた脱腸の新たな不快と重なった」、「(医師チエリは)消息子、ブージー、脱腸帯、老人病のための器具が身のまわりに集められているのを見ると、身体が若くないのに、心が若いとばちが当たらずにはすまないことを、厳しく感じたのである」、「ずっと衰弱の状態ですごし」(『告白』10巻108)。

{1761, 49歳}(リュクサンブール氏の勧めでコーム修道士の診察を受ける)「コーム修道士(記者注、練達の外科医)が消息子で検査する。モランでさえも数回試みて、いつも成功しなかった。コーム修道士は比類なく器用で軽やかな手を持ち、ついに非常に小さな中空のゾンデ(algalie; sonde creuse¹⁴⁾; 尿道カテーテル)を入れるのに成功した。だがそのため私は二時間以上もひどく苦しむ」、「最初の検査で、コーム修道士は大きな結石(une grosse pierre)を見つけたと思ひ、私にそう言った。第二回めにはそれがもう見つからなかった。二回、三回と、私には非常に長い時間をかけたと思われる、入念で正確なやり直しのあと、結石はないが、前立腺が硬性腫瘍にかかって、異常に肥大している(prostate étoit skirreuse et d'une grosseur surnaturelle)、膀胱は大きく良好な状態にあるとみた彼は(コーム)、私はひどくくるしむだろうが、長生きするだろうとはっきり言った」(『告白』11巻199)(ルソーはこの18年後の66歳まで生存している)。

「このように何年ものあいだ、かかってもいない二十もの病氣の治療を次々に受けたあと、けっきょくわかったのは、私の病氣は命に別状はないが、一生続くだろうということであった。それを知ると私の想像力も抑えられ、結石の苦痛でひどい死に方をするという、先の見通しもなくなった。ずっとまえに尿道のなかで折れたブージーのかけらが、結石の核になったのではないか、という心配もなくなった。私にとって現実の病氣よりも、もっと苛酷な想像上の病氣から解放され、現実の病氣をずっと心静かに耐えた。このとき以来私は、それまでよりも病氣で苦しむことがずっと少なくなったのは確かである。この安らぎがリュクサンブール氏のおかげであることをかならず思い出し、彼を追憶してあらためて感動せずにはいられない」(『告白』11巻199) 著者注5)。

{1762, 50歳}「酔ったよう、頭のしびれ、はげしい動悸、歩きながら呼吸できない、ひどい興奮、落涙」(『手紙』301)、「体の痛み、熱になやまされる、不眠」(『手紙』306)。

3) 晩年・死亡時(1776~1778, 64~66歳)

{1776~1778, 64~66歳}(犬にぶつかり意識喪失)。「上

顎は凸凹だらけの舗道に打ち付けられ、「全然意識がない」、「痛みも、恐れも、不安も感じない」、「うっとりとした静けさを感じる」、「多量の血を吐く」、「右手の親指はくじけて腫れあがり」、『散歩』26)。

(4月末に身体の不調を感じ死の近いことをさとしたのか、ルソーは田園にかえることを願う。5月22日、パリから約30キロのエルクノンヴィルへうつつた直後、ヴォルテール(1694~1778、啓蒙主義を代表する思想家)の死を聞いて彼はつぶやいた、「わたしの存在は彼の存在に結びつけられていた。彼は死んだ、わたしが彼のあとを追う日も遠くあるまい」と)³⁾(樋口、他)。(7月2日、例のごとく早朝起床して散歩、8時帰宅、朝食、しばらくして突然気分がわるくなる。「彼は足の裏がちくちくしてとても気持ちが悪い、背骨にそって氷水が流れるような寒気がする。胸が苦しい、発作のときのようなとても激しい頭痛がする。とつぎつぎと訴えました。彼が両手で頭をかかえたのはこのことの表現だったのでしょう。そして、頭蓋骨がわれるようだといいました。この発作ののちに、彼の生命は絶え、椅子から下にたおれました。すぐだき起こしましたが、彼はもう死んでいました」。ときに午前11時。死のただ一人の目撃者となったテレゼはルソーの最後をこのように伝えている。翌日、近所の医者が解剖をおこない、漿液性卒中が死因であるという証明書を書く)³⁾(樋口、他)。著者注6)

ルソーの医学知識、医師についての考え方、態度

ルソーの作品には通風、リウマチ、中風、肺炎、肋膜炎、癲癇、躁鬱症、不眠症などの疾患、症状以外に、泌尿器疾患としては、尿閉症、腎石、尿石、腎臓炎、膀胱炎、前立腺腫瘍、性病、梅毒や、消息子(ゾンデ)、ブージー、尿道カテーテルなどの、泌尿器科の専門的な用語も出てくる(表1)。ルソーは医学知識を持っていたと考えられる。

ルソーは医師の医学を信用せず、敵意を持っていた。「看護と用心と信じられないほどの骨折りによって、彼女(ママン)は私を救ってくれた。そしてたしかに、彼女だけが私を救うことができたのである。私は医者の医学を信用しないが、真の友人のそれは大いに信用する」(『告白』5巻246)。

「自然状態の人間にはほとんど薬が必要はなく、医者はなおさら必要ではない」(『不平等論』48)。

「わたしは医者がどんな病気をなおしてくれるのかは知らない。医者が非常に有害な病気をもたらすことを知っている」(『エミール』上56)。

「自分のためには決して医者と呼ばない。生命があきらかに危険状態にあるときは別だ。その場合には医者もかれを(エミール)を殺す以上に悪いことをするはずはない」(『エミール』上58)。

「賢明なロック(訳者注、1632-1704、イギリスの哲学

者、政治思想家)はその生涯のある時期を医学の研究にすごしたが、用心のためにも軽い病気のためにも、子どもには決して薬を与えないように熱心にすすめている」(『エミール』上58)。

「かれらが(医者)なおした病人のうち幾人かはかれらがいなければ死んでいたかもしれない。しかし、かれらが殺した幾百万の人は生きていたことだろう」(『エミール』上108)。

「医者と哲学者は、自分の説明できることしか真実とは認めず、自分の理解力を可能な尺度としている」(『告白』6巻284)。

「わたしはかれらの技術のむなしいこと、その診療がなんの役にもたたないことの生きた証拠なのだ」(訳者注、ルソーは生来の尿閉症に苦しんで、1750-62のあいだ当時の有名な医者の治療を受けている) (『散歩』115)。

一方、ルソーは医学や医師について、肯定的な見解を述べている個所もある。ヒポクラテスを知っていた。いくじなしの病人がいるとも考えていたようだ。病気と神、病気と精神との関係、生命観について述べている。死にたくないと考えていたようだ。

「医学にはかって大きな信頼をよせたことがないわたしではあるが、わたしが尊敬していた医者は大いに信頼して、わたしの身体の世話を完全に任せきったこともある」(『散歩』116)。

「医学が嫌いで、ふざけたことをしては、いつも陽気に騒いでいたが、それがなければ医学が好きになれたかもしれない」(『告白』3巻125)。

「(原注 ケルススは今日非常に必要になっている食養生はヒポクラテスによって発明されたにすぎないと報告している)(ケルスス、訳者注 紀元前1世紀のローマの医者、博学者。ヒポクラテス云々は、彼の著作『医学について』De Medicinaをさす)」(『不平等論』48)。

「わざわざを除いてやろうといっても、人民は、さわられるのさえ辛抱できない。それは、医者の姿をみただけでみぶるいする愚かな、いくじなしの病人に似ている。」(『社会契約論』68)。

「すべて権力は神からでてくる。すべての病気も神から出てくる。」(『社会契約論』20)

「病気というものはすべて神からくるものといえるのではないか。しかし、だからといって、医者を呼ぶのは罪となるといえるのか」(『エミール』下229)。

「肉体の病は精神を枯渇させる」(『演劇』30)。

「医者にかからずに十年生きた人は、医者に悩まされながら三十年生きた人にくらべて、自分にとっても他人にとっても、よけい生きたことになる」、「時あるいは死はわたしの病気をなおす薬となる」、「老人は若者以上に生命を惜しむ。60歳になってもまだ生きたともいえないのに死ぬのはじっさいつらいことだ」、「もともと人間は、自分の身をまもる手段があるあいだだ

け身をまもろうとあせるのだ」(『エミール』上108)。

考 察

歴史上の人物を含めて、過去にどのような疾患があったかは、医師が書いた診療録でなくても、歴史書、文学作品、手紙などで、ある程度、推測可能と考えられる²²⁾。自伝的作品の疾患記載では、医師の疾患の説明を患者である作者がどう理解したかも問題で、医師が患者であっても同様である²³⁻²⁶⁾。また、患者が医師をどのように考えていたか、信頼していたか等の患者対医師関係も問題となる²¹⁾。

ルソーの疾患や異常については、ほとんど、『告白』に基づいているが、尿閉症、尿道の疾患などの泌尿器疾患、妄想、変質症などの精神疾患、泌尿器疾患と精神疾患との単なる合併、または、泌尿器疾患と精神疾患とが関係している疾患との論考があり、作品との関連も考察されている。一方、ルソーの疾患について、全く触れていない論考もあるが(山本周二)⁶⁾、思想は思想で、疾患とは別の問題であるとも考えられる。

以下、ルソーの疾患や異常に関する代表的な論考を挙げる。「泌尿器系の持病、しきりに尿意をもよおす。それがかれを社交界から遠ざけていた。尿閉、脱腸、妄想、精神錯乱、狂気」(中里良二¹⁾)、「被害妄想、錯乱、尿道の持病、ノイローゼ」(平岡昇²⁾)、「動悸、耳鳴、不眠症、幼児のときからの尿閉症。尿閉症がたちの悪い病気であると思ひ込んで、ひた隠しにしていた」(樋口謹一、他³⁾)、「異常精神、錯乱、狂気」(生島遼一、19683)、「迫害妄想」(西川長夫⁴⁾)、「神経病、心臓病、膀胱の病気、尿管の病」(酒井三郎⁵⁾)、「尿失禁、尿毒症」(ロビンソン⁷⁾)、「妄想」(フーコー⁸⁾)、「変質症、精神病質、神経症、パラノイア、解釈妄想狂、敏感関係妄想、尿道に起因する脳障害」(スタロバンスキー⁹⁾)、「ルソーは尿閉症になやまされていた。ルソーは病気を大げさに考えるくせがあったらしいが、それはじっさい重大な病気だったとも考えられる」(今野一雄、手紙、エミール下巻32218)とある。また、ジルボーグは彼の『医学的心理学史』で、「ルソーは医者はいらないから医学をくれと述べている。もし彼が雄弁を用いて僭越と無知に対する反対の声をあげ、真に才能のある者が科学の研究に従事するようにすすめてくれたならば、彼は人類によりよい奉仕をなしたであろう」¹⁰⁾と述べているが、心理学的には必ずしも正常とは言えない点を指摘しているとも考えられる。

ルソーは『告白』の冒頭で、「これは自然のままに、そしてまったく真実のままに、正確に描かれた唯一の人間像であり、このようなものはまたとなく、おそらく今後もないだろう」(『告白』第1巻11)と述べている。

一方、『告白』は「告白を核とした近代の小説に近く、おのずからなる虚構をふくんだ文学作品なのである」(松本勤)³⁾といわれている。『告白』の記載がどの程度

表 1. 作品中の疾患名、症状名一覧

「通風」(『不平等論』46, 『エミール』上44, 『告白』11巻176, 『散歩』114)
「リウマチ」(『不平等論』46, 『不平等論』手紙208)
「喘息」(『告白』6巻252)
「中風患者」(『社会契約論』83)
「癲癇」(『告白』2巻79, 『散歩』114), 「痙攣」(『エミール』中29)
「憂鬱症」(『告白』6巻272, 274, 『手紙』294)
「狂気の発作」(『手紙』304), 「狂躁病」(『散歩』100), 「譫妄」(『不平等論』手紙212)
「不眠症」(『告白』6巻251, 11巻206, 『手紙』306)
「肋膜炎」(『告白』5巻228)
「腎臓炎」(『エミール』中33, 『告白』8巻392), 「膀胱炎」(『告白』8巻392)
「尿閉症」(『告白』6巻257, 273, 8巻392, 396, 11巻206)
「前立腺腫瘍」(『告白』11巻199)
「腎石」, 「結石」(『告白』8巻396), 「尿石」 「尿といっしょに結石を排出」(『エミール』中20)
「胆石」(『散歩』114)
「脱腸」(『告白』10巻108)
「老人病」(『告白』10巻108), 「ペスト」(『散歩』118)
「伝染病」(『不平等論』原注150, 『エミール』上137)
「性病」(『告白』6巻274), 「梅毒」(『告白』7巻348, 12巻262, 263)
「馬の鼻疽病」(『散歩』112), 「疥癬」(『散歩』112), 「湿疹」(『散歩』112)
「せむし」, 「びっこ」, 「かに股」, 「発育不全」, 「関節不能」(『エミール』上35)
「・・・鉱山労働や金属・鉱物、とりわけ鉛・銅・水銀・コバルト・砒素・鶏冠石などのさまざまな調製などのような、寿命を縮めたり、体質を壊したりするあの多数にのぼる不健康な職業(訳者注: 18世紀の初頭から職業病の存在が目目されていた)」(『不平等論』原注154)
「薬剤で中毒」(『不平等論』48)
「心臓の肉腫」(『告白』6巻273, 274), 「胃の腫瘍」(『告白』8巻405)
「近眼」(『告白』第6巻250)
「傷」(『エミール』中38, 『散歩』28, 74), 「火傷」(『告白』5巻211)
「激痛」(『告白』11巻176), 「腹痛」(『エミール』上63), 「石の痛み」(『エミール』中20)
「発熱」(『告白』6巻274, 11巻176), 「微熱」(『告白』5巻242)
「熱病」(『不平等論』52, 『散歩』114)
「息切れ」, 「ため息」, 「動悸」(『告白』5巻242)
「めまい」(『告白』6巻272), 「脳髄」(『散歩』75), 「神経系」(『エミール』上79)
「血」(『散歩』27, 74), 「咯血」(『告白』5巻242), 「鼻血」(『エミール』上98)
「食餌療法」(『告白』6巻283)
「衛生学」(『エミール』上59), 「解剖学」(『告白』5巻202, 6巻273, 『散歩』118)
「生理学」(『告白』6巻273), 「薬学」, 「煎薬」, 「膏薬」(『散歩』113)

真実であるか、また、ルソーの記載が医学的に正しいかは不明であるが、ルソーは疾患についてかなりの知識があり、記載も多いことから、疾患の推測は可能と考えられる。

『告白』には、「膀胱の構造の欠陥」(un vice de conformation dans la Vissue)による「尿閉症」(rétension d'urine¹⁴⁾)と医学用語が出ている。「尿閉症」は尿路閉塞症のうち下部尿路閉塞症で、おそらく、完全尿閉(全く排尿できない状態)ではなく、排尿困難と考えられる。排尿状態、疼痛、尿失禁などの情報が不足しているため、どのような排尿困難かは、ルソーの記載からは不明であるが、膀胱の異常による排尿困難を考えているようだ。「しばしば尿意をもよおす」(fréquents besoins d'uriner)とは、尿意切迫感、尿意頻数、頻尿が考えられる。

ルソーの排尿困難と尿意切迫感は、幼少期からの慢性疾患であるが、症状、主訴は時期、年齢で異なる。疾患は主として、『告白』の1,5,6,7,8,10,11巻に書かれており、他の巻には疾患の記載はほとんどない。疾患、症状の記載は、巻により濃淡があり、著しく異なっている。ルソーは青年時代に猛烈な勢いで勉強し、壮年時代に多数の著作を出している^{1,3)}。疾患と仕事との関係は必ずしも明らかではなく、「病気が軽くなったわけではないが、勉強に熱中するのはじつに気持ちいいので、もう病気のことなど考えず、その影響を受けることがずっと少なくなった」(『告白』6巻257)とある一方、逆に、「こんなに高く、苦しくて、つらい手当てをして、気を散らさずに、仕事ができるはずがない」(『告白』8巻396)と、また、状態が悪いと、すぐに「死にそうだ」、「死ぬと思う」と言っている。

スタロバンスキーは、「(ルソーの前述の⁹⁾これらの徴候は、パラノイアに近い病的状態、敏感関係妄想に特徴的なものであり、その土台にあるのは『敏感性格』である。…ルソーの作品と生涯の全体に病気の刻印をとどめているだろうか。むしろ逆に、精神障害は、後から生起し、間歇的なエピソードで表面化した付加的な現象にすぎないのではなからうか」と述べている⁹⁾。

ルソーの疾患が何かは推測の域をでないが、考えられる疾患と、診察のためには不足している情報を、1) 幼児期、2) 青年期～壮年期、3) 晩年・死亡時(死因)の三期に分けて考察した。

1) 幼児期

排尿困難は幼児期(または、生下時)からで、尿意はあるが、発熱、排尿痛の記載はない。記載がないことと、症状がないこととは必ずしも一致しないが、記載し易い症状、疾患と、記載し難い症状、疾患がある。発熱、疼痛などの苦しい症状があれば、記載すると考えられる²²⁾。ルソーの作品中には、夜尿症、尿失禁、

便失禁などの失禁や下痢に関する記載はないが、失禁は公には記載されないことが多い。私信(ママンへの手紙)には、下痢のことが書いてあるが、文学作品よりも、私信の方が確かと考えられる。尿失禁を指摘している論者(ロビンソン)⁷⁾もいるが、尿意切迫を伴う切迫性尿失禁が考えられる。その他の尿失禁としては、尿閉症に合併する溢流性尿失禁もありうるが、考え難い。

尿閉症の原因としては、膀胱機能障害、尿道の器質的、機能的狭窄があり、男児では先天性尿道狭窄、先天性尿道弁(congenital urethral valve)、または、神経因性膀胱(neurogenic bladder)が考えられる。尿道狭窄は尿道の器質的狭窄による排尿困難で、先天性と後天性がある。尿道弁は尿道弁に起因して排尿困難を起こす先天性奇形で、尿道口よりの逆行性ブージー検査では尿道狭窄は認められないが、順行性の排尿に際しては、尿道弁により排尿困難をきたす疾患である。

神経因性膀胱は膀胱機能障害で排尿困難をきたす疾患で、感覚、排尿機能障害例の両方がある。膀胱の形態に異常をきたす場合もある。脊椎や脳障害、糖尿病、梅毒の脊髄癆による神経因性膀胱もある。性機能障害を合併する場合がある。尿意切迫感があるなら、尿意感覚の障害はなく、排尿痛、発熱の記載がない事から、急性の尿路感染症の合併はなく、また、66歳まで生きたことから、尿路閉塞による重症の腎機能障害、尿毒症はないと考えられる。

頻尿は多尿、あるいは、膀胱容量の低下が原因となるが、腎機能障害時の多尿期、または、飲水過多による多尿、萎縮膀胱なども考えられる。ただし、「膀胱は大きく良好な状態」(11巻199)とのコームの記載はある。夜間頻尿か、昼間頻尿かは不明である。

2) 青年期～壮年期

青年期では、不眠、衰弱、息切れなどの精神・神経症状が加わっている。排尿困難・尿意切迫感と精神・神経症状が別々の疾患か、関係する疾患かは不明であるが、この個所では、精神・神経症状の記載が多く、泌尿器症状はとくに強くは訴えていない。

1748(36歳)の疾患は、排尿困難に、発熱、疼痛の症状が加わっていることから、尿路感染症(膀胱炎、腎盂腎炎、前立腺炎なども含む)の合併が考えられる。排尿困難は尿路感染症を合併し易いが、性感染症が直接の原因となる場合と、性感染症とは関係無しに、幼児からの尿閉症の進行、悪化が原因となる場合が考えられる。また、症状の変化は、疾患本来の苦しみもあるが、治療としてのゾンデ(sonde¹⁴⁾)、ブージー(bougie¹⁴⁾)などによる経尿道的操作の苦しみや、前立腺炎などの合併症も考えられる。排尿時に腹圧をかけることから、排尿困難と脱腸は合併し易い。

後天性の排尿困難には、経尿道的操作による尿道損

傷後の尿道狭窄の合併，あるいは，膀胱頸部硬化症も考えられる。淋菌性尿道炎と淋菌性尿道炎後の尿道狭窄もその一因となる。ルソーが性感染症に罹ったという説と，罹っていないとの説は^{27,28)}，両説共に、『告白』の記載からの推測であるが，逆の結論が出ている。ルソーはなんの症状もないのに，性感染症を極端に心配していたが，医師の「特別の体質で，簡単には感染しない」との説明を受けて安心し，医師の判断が正しいと述べている。

ルソーは散歩が好きで，「根本的には健康であった」³⁾といわれていることから，重症の脊椎障害や脳障害による神経因性膀胱は考え難い。子供が5人いるから，性機能障害はないと考えられる。ルソーの肖像画では，ほぼ正常な体型で，極端な痩せや肥満ではない。

排尿困難，尿意切迫感膀胱結石の症状でもある。モンテーニュ（1533-1592，享年59歳，16世紀の思想家で，万巻の書を咀嚼した。ルソーに大きな影響を与えた¹⁹⁾。）の『エッセー』²⁹⁾には結石発作の記載がある。ナポレオン三世（1808~1873，享年65歳，ナポレオン一世の甥）^{30,31)}も尿路結石で苦しんでいた。『告白』には自然排石の記載はないが，『エミール』には自然排石の話がある¹⁹⁾。ルソーは排尿困難で自然排石は困難と考えられるが，激しい尿閉症が結石嵌頓による完全尿閉かははっきりしない。膀胱結石ならば，激しい痛みを示さない大きな膀胱結石も考えられる。ルソーは尿路結石の苦しさを知っており，コームに「結石はない」といわれて，安心したようだが，尿路結石合併の可能性はある。violente néphretique, colique néphretiqueは，激しい腎臓炎（腎盂腎炎）とも，結石による腎臓の疼痛発作ともとれる。尿路結石には激痛を伴う結石と，伴わない結石（silent stone）がある。排尿困難例は，尿流停滞のために，二次的に尿路結石を合併し易く，また，ゾンデが折れて結石の核となる異物結石も考えられる。

鑑別診断としては，49歳以前からの排尿困難であるから，前立腺肥大症は考え難い。66歳まで生存しており，衰弱，腰痛などの前立腺癌を疑わせる所見はない。診断根拠となる検査所見はないが，ルソーのような尿道のひどい苦しさを訴える疾患には，除外診断として，prostatisme sans prostate，または，いわゆる，prostatism，プロスタティズム，前立腺症，心身症や神経症的不定愁訴を訴える疾患として，prostatodynia，プロスタトディニア，前立腺痛（症）も考えられる。前立腺症は致死疾患ではないが，患者の訴えに対して，疾患を証明する検査所見が乏しく，上記の疾患には，精神的異常とされているものもあり，精神病との境界領域の疾患とも考えられている。

尿閉症の診察手順はエコーやX線検査がなければ，今でも，まず，尿道カテーテルで尿道狭窄の有無，位置，程度を検査する。器質性尿道狭窄なら，カテーテ

ルは常に同じ箇所と同じように入り難いものである。次に直腸診で前立腺の大きさと硬さを検査し，前立腺が狭窄に関係しているかを調べ，これらに異常所見が無ければ，膀胱の異常を考える。

コーム以前に診察した医師の説明では，前立腺の異常に関する説明はなく，カテーテルは挿入し難いが，挿入不能ではなく，入ったり入らなかったりしている。もし，診察した医師が，ルソーに前立腺が大きく，尿道狭窄があったと説明していたら，ルソーは『告白』にそう記載したと考えられる。医師はルソーに前立腺疾患，尿道狭窄がないことから，尿閉症の原因としては「膀胱の構造の欠陥」と考えたのではなかろうか。ただし，当時，「膀胱の構造の欠陥」が「尿道疾患」を含んでいたかは不明であるが，ルソーとほぼ同時代のナポレオン一世（1769~1821，享年52歳）の記録³²⁾には尿道狭窄，『エミール』¹⁹⁾には，結石による尿道の傷に関する記載がある。この時点では，尿道弁，神経因性膀胱が考えられる。

器質的尿道狭窄に対しては，経尿道的操作は尿道拡張による排尿の改善が期待されるが，尿道弁，神経因性膀胱ではカテーテル操作による排尿の改善は期待し難い。ただし，尿道弁と尿道狭窄の合併，神経因性膀胱と尿道狭窄の合併では，多少の改善が期待できる。ルソーの場合，著効でも無効でもなく，多少の効果があつたことから，尿道弁と尿道狭窄の合併，あるいは，神経因性膀胱と尿道狭窄の合併も考えられる。

カテーテルの挿入は，狭窄の程度や医師の腕前も関係するが，狭窄が軽度でも疼痛が加わると，尿道括約筋の攣縮で入り難い尿道があり，過敏性の患者では死ぬほどの苦しみを味合う。ルソーが用いたカテーテル（ゾンデ）の形状，材質は不明であるが，柔らかい方がおそらく疼痛は軽度で入り易かったようだ。器質的尿道狭窄では，固い方が入り易い場合もある。カテーテルが狭窄で本当に入らない場合もあるが，医師は言い訳として，前立腺のせいにして，患者には「前立腺が大きくて入らない」と説明する医師がいる。

最後に診察したコームのみが「前立腺が異常に大きく硬い」と言っている。多少，苦労したが，結局，カテーテルは入った。「surnaturelle」は「超自然的，異常な」であるが，49歳での巨大な前立腺肥大症，前立腺癌は考え難い。ルソーの「死ぬかも知れない」と同様の，誇大な表現と考えられる。医者が，あいまいに，「前立腺は一寸大きいですね」というと，患者は前立腺が異常に大きいと早合点することがある。ルソーの場合，すでに，多くの医師が経尿道的操作を行っており，経尿道的操作後の合併としての前立腺炎，尿道狭窄も考慮に入れる必要がある。「skirreuse」(squirreux)は癌の硬さの表現であるが，前立腺の悪性腫瘍（癌）ではなく，慢性前立腺炎の状態とも考えられる。

コームは他の医師とは異なり，「膀胱は悪くない」，

「前立腺が悪い」と「はっきり言っている」(déclarer 言明)。ルソーが最も心配した疾患は「尿閉症、結石」、
「性感染症」で、「前立腺腫瘍」、「尿道疾患」はルソー
にとっては心配する疾患ではなかったのではなかろう
か。「膀胱が悪く、結石」との診断は、ルソーには死に
も匹敵する苦しみ宣告であったと考えられる。これ
に反して、「膀胱は悪くなく、結石ではない」、「性感
染症」にかかりにくい体質との医師の言明は、ルソー
を安心させ、結果的には症状は改善している。

ルソーはコームの話を信用したのであろう。これに
反して、他の「悪い」(mal)医師がいった「かかって
もない二十もの病気」についての、おそらくは、「はっ
きりしない説明」は、ルソーを心配させ、信用もしな
かった。ルソーの疾患と医師に関する考え方は、率
直、明白で、自分がその説明に納得すれば信用して安
心し、症状は改善する。そして、医師が正しいと記載
する。納得しなければ信用せず、極端に心配して、症
状は悪化し、死ぬかもしれないと考える。そして、医
師が悪いと激しく非難する。

ルソーは医師に対して不満を述べているが、ルソー
の疾患が尿道弁、神経因性膀胱、または、前立腺症と
したら、現在の泌尿器科医にとっても、扱い難い疾
患である。「死ぬほど苦しい」と訴える患者に対して、
はっきりとした検査所見が認められないことから、説
明はあいまいになり、「どこも悪くない。気のせいだ」
とする医師との間にトラブルが発生し、刃傷沙汰にな
ることもあるといわれている。いわゆる前立腺症には
意思の疎通のはかり難い患者が多い。ルソーが前立
腺症かは不明であるが、類似点も認められる。

疾患の説明に関しては、不明の点を含めた医師の正
直な説明を信用する患者と、逆に、断定的な説明を信
用する患者がいる。また、「どこも悪くない」との説明
で安心する患者と、逆に、かえって心配し、「ここが悪
い」と「はっきり言われて」初めて安心する患者が
いる。

ルソーは好き嫌いがはっきりしており³⁾、医師に対
しても同様である。ある医師にとっては扱い難い患者
と感じられるようだが、逆に、要領さえつかめば、扱
いやすい患者かもしれない。親切なリュクサンブール
氏に感謝してからは、ルソーは長年の不満が軽減した
と述べているが、この話は、現在でも前立腺症の治療
上参考になる事柄である。

当時、ゾンデ、カテーテルは高価で、ルソーは1年
分以上の生活費に相当する費用を払ってでも、治療を
受けていたが、疾患は治らず、苦しみは続き、ルソー
の怒りはいかばかりであったことだろう。ルソーは医
学の知識もあり、ヒポクラテスも知っており^{19,33)}、医学
を信用しているが、医師を信用せず¹⁰⁾、医師に対して
極端な敵対意識を持っている。さすがに、医師に対し
て、刃傷沙汰や、暴力行為はしていないが、文の剣で、
医師を突きまくっている。自分の疾患に対する不満が

つのも、後に社会に対する不満と重なり、『人間不
平等起原論』の起原になったと推測出来なくはない。

「私は人類のなかに二種類の不平等を考える。その
一つを、私は自然的または、身体的不平等と名づける。
それは自然によって定められるものであって、年齢や
健康や体力の差と、精神あるいは魂の質の差から成り
たっているからである。もう一つは、一種の約束に依
存し、人々の合意によって定められるか、少なくとも
許容されるものだから、これを社会的あるいは政治的
不平等と名づけることができる」(『不平等論』36)。

ルソーの医師に対する不満の表明の仕方は、現
代と大差はなく、ルソーの社会変革の思想と同様に、
医師への不満の表明が医療変革の起動力で、現代の
患者対医師関係の先駆けになっているとも考えら
れる^{21, 著者注7)}。

ルソーは『社会契約論』と『エミール』とをほぼ同じ
時期に出版しているが^{18, 19)}、身体の不調で、死ぬか
もしれないという精神状態で、『社会契約論』では政治
論としての社会に対する不満を、『エミール』では、『社
会契約論』では書けなかった(書かなかった)教育、宗
教、哲学、さらには、医学に対する個人的な不満をも
書いており、ルソーの思想はこの二冊で一セットと考
えられる^{著者注8)}。

3) 晩年と死亡時(死因)

ベルナルダン・ド・サン・ピエールは、晩年のルソー
(1772, 64歳)の印象を、「…椅子にかけて、楽譜を写
していた。かれは笑いながら立ち上がって、…。仕事
をしながら話した」、「体は、丸く秀でた額、熱情をた
たえた目。…」、「話に心を動かされるにつれて、そ
うした感情(沈鬱、辛辣、悲しみ、澁刺)が顔面につ
ぎつぎにあらわれる」、「…非常に感じやすいかれ
は、人がなにか不幸な出来事の話をする、涙を流
して聞いていた」と述べている²⁰⁾。感情過多ではある
が、とくに、病的な身体所見の記載はなく、例えば、
極端なやせ、貧血、黄疸、浮腫、運動障害、言語障害
や、腎機能障害、尿毒症の重症なものはおそらくな
いと考えられる。精神的にも、晩年になってからは、
「心は平和」^{3, 20)}と言われている。

前立腺肥大症、前立腺癌、膀胱頸部硬化症、尿道狭
窄、膀胱結石、腎機能、とくに、濃縮力機能低下によ
る多尿は、加齢で進行することが多いが、ルソーの場
合、晩年になって、尿閉症、尿意切迫感が悪化・進行
したという記載は見当たらない。あれだけ苦しんだ症
状の記載がないことは、ルソーの疾患が上記の器質的
疾患で、自然に治ったとは考え難く、青・壮年期にひ
どかった症状が、老年になって軽減したためと考えら
れる。尿道狭窄はあったかもしれないが、尿道狭窄だ
けでは病状の説明は困難である。

高齢になってからは文筆活動が衰えたためか、死

亡した時期では、身体状態や疾患に関する記載は少ない。死亡3月前に身体の不調を感じたとあるが、死亡当日(1778, 66歳)は早朝起床して散歩しているから、健康上、とくに問題はなかったと考えられる。8時帰宅、朝食後、しばらくして気分が悪くなり、激しい頭痛の発作が起こり、3時間後に死亡している。本論考では死因に関する資料は少なく、すべて引用であるが^{1,3,7)}、テレーゼの話が正しいなら^{1,3)}(テレーゼのルソーの病状に関する記載³⁾; テレーズの話に基づく医者¹⁾の記載¹⁾)、ルソーの死は突然死で、死因は急性の脳血管障害(cerebrovascular accident; C.V.A.)で、脳動脈瘤(intracranial aneurysm)も考えられる。ただし、尿毒症説、自殺説もあり、以下の記載がある「1778年5月胃の痛みを訴える。死因は尿毒症だろう。自殺という噂もたった」(ロビンソン⁷⁾)。

テレーゼの記載は、具体的、かつ、簡明で分かりやすく、脳血管障害が疑われる。一方、ルソーの記載からは、どのような尿閉症かは分かり難い点もあるが、複雑な病態が考えられ、時期、年齢による差異がある。

著者注

1: 疾患、症状の用語について³⁴⁻³⁹⁾

尿路閉塞症: 尿路が閉塞する疾患の総称で、上部尿路(腎、尿管)と下部尿路(膀胱、尿道)閉塞がある。器質的閉塞と機能的閉塞がある。水腎症、尿路感染症、腎機能障害を合併することがある。

尿閉: 下部尿路閉塞症状。完全(急性)尿閉は排尿が全く出来ない状態。

前立腺肥大症: 閉塞症状、刺激症状を伴う男性高齢者の前立腺良性肥大疾患。

前立腺癌: 前立腺の悪性腫瘍、脊椎骨転移を多発する。

前立腺炎: 前立腺の炎症疾患。急性では発熱、排尿痛がある。

prostatism, プロスタティズム, 前立腺症: 閉塞症状、刺激症状などの前立腺肥大症のsymptom complex(症状群)、または、疾患群の総称。

prostatisme sans prostate(仏語): 前立腺肥大症の症状を呈するが、前立腺肥大症ではない場合の疾患名で、この逆は、silent prostatism(前立腺肥大症の症状のない前立腺肥大症)。

prostatodynia, プロスタトディニア, 前立腺痛(症): 前立腺炎様症状を呈するが、炎症症状を認めないものの総称。その原因は単一ではなく、前立腺以外の臓器に由来する場合もあるとされる。精神的要因と器質的要因の両方が関係しているとする見解が有力である。

閉塞症状: 排尿困難、弱い尿流、排尿時のいきみ、排尿時間の延長、尿閉、溢流性尿失禁など

刺激症状: 尿意切迫、頻尿、夜尿、切迫性尿失禁など。

尿意切迫: 排尿を我慢できない状態で、尿失禁を合併する場合がある。

排尿困難: 痛みを伴う排尿困難(急性膀胱炎の症状)と、痛みを伴わない排尿困難(前立腺肥大症の症状)がある。前者をdysuria(英語)、後者をDysurie(独語)と言う場合がある。

これらの用語は、引用原典、または、英、独、仏、日本語で意味が異なることがある。

2: 疾患時の年齢について

年齢はルソー年表³⁾によるが、引用論考により、疾患の時期に多少のずれが認められる。ルソーは1712年6月28日生まれ、1778年7月2日死去であることも、疾患の年と年齢の差異に関係する。『告白』は第1部(1~6巻)と第2部(7~12巻)に分かれ、大体、年齢順に話が述べられている。第1巻は出生から16歳まで、第2~4巻は放浪記で19歳まで、第5~6巻は1732~1742、20~30歳頃の話と推測される。第7巻1742~1749、30~37歳、第8巻は1750~1756、38歳~44歳9~11巻は1757~1762、45~50歳、第12巻は1765、53歳頃の話と推測される(松本勤を参照³⁾)。第1部は記憶で書かれているが、その結びに、「以上が私の青年期の誤りと罪である」とあり、末尾に、「あらゆる種類の誤りにみちたこのノートを、私は読み返す暇もない」と述べている。第2部は第1部の2年後、「二年間の沈黙と忍耐ののち、決心をひるがえして、ふたたびペンをとる(『告白』第7巻303)とある。第2部は1760、48歳頃³⁾の書簡集を参考にして書かれたもので、壮年期の話と推測される。なお、第6巻251には、1764年(52歳)の時の話が「30年前のツルニチ草の思い出」として(この話はルソーの30年前の記憶に関する話として、引用している論考がある⁶⁾、第8巻392には、幼少から青年期の疾患が挿入されており、日記のようにすべての話が年齢順に記載されている訳ではない。

3: ママンについて

ママンとは、Mme de Warens(ヴァランス夫人³⁾、ヴァラン夫人¹⁾)のことで、ルソーの生母は産後死亡している。ルソーは1728、17歳の時、ヴァランス夫人(当時28歳²⁰⁾、夫と別れていた)と会い、ヴァランス夫人はママンの役割をした。ヴァランス夫人はルソーをプティ(坊や)と呼んでいる。後にルソーはヴァランス夫人の愛人となるが、夫人は執事のアネも愛人としていた。ヴァランス夫人とは近親相姦的な感覚で、後の性的関係に影響したといわれている³⁾。ルソーの性的関係は多彩で、テレーゼ(後出)はじめ、多くの女性、男色、娼婦の話が『告白』にでて^{3,15)}(当時、既婚者は愛人を一人持つのは珍しいことではなかった。ただし、愛人が二人以上になると争いになることがあり、ルソーもこの種のトラブルを引き起こしたことが記載されている)。

4: 貨幣価値について

1ルイは20フランで、50ルイは1000フラン。ルソーは28歳、家庭教師での年俸は400フラン、31歳、秘書での年俸1000フラン、37歳、秘書(後に会計役)での年俸は900~1000フランであったから³⁾、50ルイは1年間の生活費に相当する額と推測される。35歳の時、母の遺産3000フランを得ている。なお、「800フランでは、私(ルソー)の衣食住に十分とはなりえない」(『告白』第7巻309)、「フランクイユ氏は年に八百か九百フランでは、私には足りないだろうと感じ、自発的に、私の年俸を五十ルイまであげてくれた」(『告白』第8巻383)とある。

5: リュクサンブール氏について

リュクサンブール氏との出会いは、ルソー1758年46歳。モン・ルイでの隣人、国王の友人、貴族で、ルソーのパトロンのような人で、著作の出版にも協力している³⁾。

6: テレーゼについて

テレーゼは下宿の洗濯女。ルソーは1768年、56歳の時、テレーゼと結婚する。テレーゼとはそれ以前から同棲しており、テレーゼとの間に5人の子供があったが、テレーゼの家族も多く、生活苦のために5人とも捨て子した(1746~1752, 34歳~40歳)。しかし、捨て子(エクセボゼ)ではなく、子供の幸せを考えて、孤児院に子供を置いてきた(デポゼ)とも言われている(「私は子供たちを自分で育てることができないので、公教育[孤児院]に託し、」とある。『告白』8巻388)。

7: 現代における医療問題について

現代における医療問題の一つとして、患者のエンパワーメント(empowerment)、「患者自身が病気に対処する力をつけること」と、患者のアドボカシー(advocacy)「苦情受付」、「その病気を患者自身が理解し、治癒またはクオリティ・オブ・ライフ(Quality of Life, QOL: 生活の質)の高い人生を送ることができるように患者が主張することであり、社会を変革していくことである」²¹⁾とがある。

8: 『社会契約論』と『エミール』について

『社会契約論』は彼の思想の到達点をしめす作品¹⁸⁾、『エミール』はかれの思想の集大成した書物¹⁹⁾と言われている。1761年(49歳)6月重病、死が近いと信じ、テレーゼ、リュクサンブール夫人に捨て子の捜索を依頼したが、見つからなかった³⁾。「自分の体のあわれな状態を思えば、わたしの著作集が印刷されたあとまで生きながらえる希望はもてなくなっています」とある(訳者注、著作集とは『社会契約論』と『エミール』のこと)(『手紙』304)。その翌年の1762年(50歳)に、『社

会契約論』と『エミール』とが出版されたが、ヴォルテールとの間で捨て子の件で論争になっている³⁾。

参考文献

- 1) 中里良二. ルソー. 東京: 清水書院; 2001.
- 2) ルソー. 自然と社会. 平岡昇訳. 東京: 白水社; 1999.
- 3) 桑原武夫編. ルソー研究. 東京: 岩波書店; 1951.
- 4) 桑原武夫編. ルソー論集. 東京: 岩波書店; 1970.
- 5) 酒井三郎. ジャン・ジャックルソーの史学的研究. 東京: 山川出版社; 昭和35年.
- 6) 山本周次. ルソーの政治思想. 京都: ミネルヴァ書房; 2000.
- 7) ロビンソン, ディブ. ルソーの哲学. 渡部昇一監訳. 東京: PHP研究所; 2002.
- 8) フーコー, ミシェル. 狂気の歴史. 田村俣訳. 東京: 新潮社; 1975.
- 9) スタロバンスキー, ジャン. J. -J.ルソー. 透明と障害. 松本勤訳. 東京: 思索社; 昭和48年. p. 327, 371-2.
- 10) ジルボーグ, グレゴリ. 医学的心理学史. 神谷美恵子訳. 東京: みすず書房; 1958. p. 146, 238.
- 11) 小西友七, 南出康世編. ジーニアス英和大辞典. 東京: 大修館書店; 2001-2004.
- 12) 新村出編. 広辞苑. 東京: 岩波書店; 2002.
- 13) 伊東高麗夫. 病蹟学夜話. 東京: 金剛出版; 昭和57年.
- 14) Rousseau Jean-Jacques. Les Confessions. Geneve: Gallimard; 1959.
- 15) ルソー. 告白. ルソー全集. 小林善彦訳. 東京: 白水社; 1979.
- 16) ルソー. 人間不平等起原論. 本田喜代治・平岡昇訳. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 2002. p. 48, 154.
- 17) ルソー. 演劇について. 今野一雄訳. 東京: 岩波文庫, 岩波書店; 2002.
- 18) ルソー. 社会契約論. 桑原武夫, 前田貞次郎訳. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 2001.
- 19) ルソー. エミール. 今野一雄訳. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 2003: 下巻 p. 322.
- 20) ルソー. 孤独な散歩者の夢想. 今野一雄訳. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 2002.
- 21) 高柳和江・仙波純一. 患者からみた医療. 東京: 放送大学教育振興会; 2003.
- 22) 斎藤博. アテネの疫病はマールブルグ病, または, エボラ熱か? 埼玉医科大学進学課程紀要 2000;8:15-25.
- 23) フーフェラント. 自伝/医の倫理. 杉田絹江, 杉田勇訳. 東京: 北樹出版; 1995. p. 32, 80, 88-128.
- 24) オスラー・ウィリアム. 平静の心. オスラー博士講演. 日野原重明, 仁木久恵訳. 東京: 医学書院; 2000. p. 32, 135, 147, 219, 288, 406, 484.
- 25) 日野原重明. 患者になった医師からのメッセージ.

- 東京: 自由国民社; 2003.
- 26) 齊藤博. 前立腺患者の視点からみた経尿道的前立腺摘除術. 泌尿器外科 2004;17:1-7.
- 27) バーン& ボニー・ブロー . 売春の社会史. 香川壇ほか訳. 東京: 筑摩書房; 1991. p. 286.
- 28) ケテル C: 梅毒の歴史. 寺田光徳訳. 東京: 藤原書店; 1996. p. 66.
- 29) モンテーニュ . エッセー . 原二郎訳. 岩波文庫. 東京: 岩波書店; 2002.
- 30) 仁平寛己. 尿路結石症. 新臨床泌尿器科全集. 市川篤二, 落合京一郎, 高安久雄編. 東京: 金原出版; 1982. p. 1-14.
- 31) 齊藤博. ヒポクラテスの謎. 東京: 図書印刷; 1996.
- 32) ジョンソン, ポール. ナポレオン. 富山芳子訳. 東京: 岩波書店; 2003.
- 33) 齊藤博. ヒポクラテスの医学教育. 埼玉医科大学雑誌 2004;31:137-46.
- 34) 市川篤二, 落合京一郎, 高安久雄監修. 新臨床泌尿器科全集. 東京: 金原出版; 昭和58年.
- 35) 小磯謙吉監修. 標準泌尿器科学. 東京: 医学書院; 2001.
- 36) Tanagho EA, McAninch JW. Smith's General Urology, a Lange medical book, Tokyo: Prentice-Hall International Inc; 1984.
- 37) Clinical Practice Guideline. Benign Prostatic Hyperplasia. Rockville: AHCP, Publication; 1994.
- 38) Dorland's Illustrated Medical Dictionary. 25th ed. Philadelphia: W.B.Saunders; 1965.
- 39) 丸山順太郎編. コンサイス仏和辞典. 東京: 三省堂; 1949.